



Title	『讃岐典侍日記』上巻の一側面：天皇の代替わりという過渡期をめぐって
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	詞林. 2009, 45, p. 29-39
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67595">https://doi.org/10.18910/67595</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『讚岐典侍日記』上巻の一側面

——天皇の代替わりという過渡期をめぐって——

丹下 暖子

## 一、はじめに

堀河天皇の「崩御の記」、「追慕の記」と称される『讚岐典侍日記』は、堀河天皇から鳥羽天皇へと、天皇が代替わりする過渡期を捉えた日記である。稿者は、この「天皇の代替わり」という時代背景と深く関わる日記として、『讚岐典侍日記』に注目すべきではないかと考え、前稿では、これまで看過される傾向にあった鳥羽天皇に関する記述を検討し、下巻が「堀河天皇追慕の記」であると同時に「鳥羽天皇の代始めの記録」としても位置づけられるものであることを述べた。その際、上巻については、下巻との関係から「堀河天皇時代の終焉の記録」とするにとどまり、論を深めるには至らなかった。

本稿は前稿を承け、「天皇の代替わり」という過渡期に対する認識を、上巻においても確認することから始める。そして、堀河天皇に対する記述に注目するだけでは見えてこない上巻の一側面について、考えてみたいと思う。

## 二、代始めの記録としての下巻

本題に入る前に、あらためて下巻について確認しておきたい。前稿では下巻の位置づけを考えるにあたり、鳥羽天皇の即位、大嘗会の御禊、清暑堂の御神楽の各記事に触れたが、今一度、補足も兼ねて、前稿とは異なる角度から代始めにまつわる記事に注目する。

讚岐典侍は、鳥羽天皇の即位に際し、褰帳の役を務めた。また清暑堂の御神楽に際しては、藤原忠実に「院より、『清暑堂の御神楽には、典侍二人さきざきも参る』とおほせられたるに、一人ぞ弁の典侍参る、いま一人は参らせたまひなや」(四六七―四六八頁)と、鳥羽天皇の典侍として特に出仕することを求められた。そうした事情もあってか、即位の日の記事には讚岐典侍が目にした周囲の人々や殿舎の様子、鳥羽天皇の姿を描き、御神楽の記事には天皇の御代を言祝ぐ言葉を連ねる。しかし、大嘗会の御禊については、やや様相を異にする。

十月十一日、大嘗会の御禊として、天の下の人、いとみなみあひたり。その日になりて、播磨の守長実御びんづらに参りたり。内の大臣殿朝餉の御簾巻き上げて、長押のうへに、殿さぶらはせたまふ。縁に、左衛門の佐、いと赤らかなる袍着て、ことおきてて。しばしありて、御びんづらはてかたになりて、藏人参り、「女御代、めんにならせたまへり」と奏すれば、「聞かせたまひぬ。ことども進めよ」と、いそがせたまふ。ことなりて、皇后宮など、めでたくしたてさせたまへり。

(天仁元(一一〇八)年十月十一日 四六二頁)

大嘗会の御禊について述べた十月の記事である。鳥羽天皇の様子を描写しようとするものではなく、御禊に携わった人々の動きを挙げておく、といった感があるだろう。十月の記事は、このように大嘗会の御禊のことを記すだけで、鳥羽天皇のみならず、日記において重要な存在であるはずの堀河天皇にも言及していない。ここで重視されていたのは、代始めの行事として、御禊を記すことであつたと言えるだろう。大嘗会に対する記述は、さらに簡潔なものである。<sup>5)</sup>大嘗会のこと、書かずとも思ひやるべし。みな人知りたることなれば、こまかに書かず。

(天仁元年十一月二十一日 四七〇頁)

右のようにあるのみで、具体的なことは書こうとしない。それでも大嘗会に触れ、日記に書かない理由まで挙げている

ことに注意すべきだろう。大嘗会の御禊も含め、こうした記述の仕方には、鳥羽天皇の代始めの行事を採録しておくという姿勢が窺われるのである。<sup>6)</sup>なお、大嘗会について「書かずとも思ひやるべし」「みな人知りたること」とするのは、あえて書かなくとも「みな人」が知っているとおおり、歴代の天皇と同様、つががなく大嘗会が終わったということを示しており、続く鳥羽天皇の御代を言祝ぐ清暑堂の御神樂の記事と同様の性格をもつものと考えられる。こうした鳥羽天皇を賛美し、代始めの行事に関する記事が散見する下巻には、堀河天皇だけでなく、鳥羽天皇の典侍という立場も深く関わっているのである。

ところで、讃岐典侍が鳥羽天皇の代始めを記すにあたって意識していた先行作品を、即位の日の記事の一節から知ることができる。

人ども、見さわぎ、いみじく心ことに思ひあひたるけしきどもにて、見さわけども、ただわれは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南のかたを見れば、例の、八咫鳥、見も知らぬものども、大頭など立てわたしたる見るも、夢の心地ぞする。かやうのことは、世継など見るにも、そのこと書かれたるころは、いかにぞやおぼえてひきこそかへされしか、うつつにけざげざと見る心地、ただおしはかるべし。

(嘉承二(一一〇七)年十二月一日 四三七頁)

傍線部の「世継」は、『栄花物語』のことである。『栄花物語』が『讚岐典侍日記』に与えた影響については、堀河天皇の崩御をめぐる記述を中心にすでに指摘があるが、鳥羽天皇の即位、すなわち代始めの記事の一節に、直接「世継」と書名が挙げられていることに、やはり注意すべきだろう。代始めの行事を記録するにあたっては、『栄花物語』を参照していた可能性があるのではないかと思うのである。ここで、『栄花物語』は代始めの行事をどのように記しているのか、やや長くなるが、堀河天皇の時のことを見ておこう。

十二月十六日御即位なり。御輿に、角髪結びて奉れる、めでたきにも涙ぐましく、故宮のまして見たてまつらせたまはましかばとあはれなり。御乳母たち典侍になりなごいとめでたし。殿、撰政せさせたまふ。ことわりのことなれど、さしあたりてはまたいとめでたし。〔中略〕御禊十月二十一日なり。女御代には殿の姫君たたせたまふ。母は故右の大殿の御子の美濃守基貞と聞えしが御女、女院にさぶらひたまひしが腹なり。さきざきかくのみぞ、ただ人の腹なれど、一の人の御女はしたまひしかば、ましてこれはなごてかは。装束は、色々、萌黄の織物、葡萄染の唐衣。今となりては、故中宮も皇太后宮も、みな色一つにせさせたまひしかば、たださきざきのさまにてと、思しめすなるべし。撰政殿をはじめたてまつりて、残りたまふ人なく仕うまつりたまへり。殿の上、姫宮た

ち、院、前斎宮などみな御棧敷にて御覧す。陽明門院、四の宮なども御覧じけり。梅壺の女御、東宮の御事を思し出づらんかし。三の宮御元服せさせたまひて、いときよげにおとなおとなしくておはします。五節なれど、例の事なり。大嘗会などめでたくて過ぎぬ。

〔卷第四十、紫野 五一六〜五一八頁〕

即位、御禊、大嘗会についての記述が見られる。この三つは、『栄花物語』で天皇の代始めが語られる際、しばしば何らかの形で言及される行事である。引用した堀河天皇の時は、大嘗会に関する記述がごくわずかなものだが、このような形であっても大嘗会に触れているところにこそ、注意される。

『栄花物語』は、代始めを語るにあたって記すべきものとして、即位、御禊、大嘗会を捉えていたことも窺えるのである。『讚岐典侍日記』も、『栄花物語』が記す三つの行事に言及する。両作品の関係については、石坂妙子氏が、『栄花物語』が堀河天皇の即位記事をもって終わることから、「堀河天皇の崩御と新帝鳥羽の即位を記す『讚岐典侍日記』は、『栄花物語』が紡いだ歴史の流れを受け継いだ書であるという側面も持つ」と述べている。こうした点を考慮すれば、『讚岐典侍日記』は、代始めの記録の先例となる『栄花物語』を一つの指標とし、鳥羽天皇の代始めの行事を採録したことも想定できるかもしれない。そして、堀河天皇に至る歴史を語る『栄花物語』への意識は、「天皇の代替わり」という過渡期に

対する関心に結びつくものでもあるだろう。

いずれにしろ、下巻が「鳥羽天皇の代始めの記録」という性格を有することは明らかである。本節では、下巻の「堀河天皇追慕の記」とは異なる一面を再確認しておく。

### 三、讓位をめぐる話

本節からは、堀河天皇の発病から崩御までの日々を記録する上巻を検討してゆく。「看取りの記」とも評されることのある上巻は、崩御に至るまでの天皇の様子を詳細に記している点が最大の特徴であるが、「天皇の代替わり」という観点から捉えた時、その中に讓位に関する記述が幾度か見られることに注目される。以下、讓位のことと語られる場面を確認してゆこう。

堀河天皇は重態に陥った後、忠実と次の会話を交わす。

「大臣はあるか」と問はせたまへば、大殿、入らせたまひて、さぶらふよし申したまへば、「御幸はなりぬるか」と問はせたまへば、「しか。なりさぶらひぬ」と申させたまへば、「参りて申せ。今は何ごとも益さぶらはじ。ただせせたまふ、尊勝にて九壇の護摩と懺法とのさぶらふべきなり。また、さぶらはんずらんことは、何ごとも今宵さぶらふべきぞ。明日明後日さぶらふべき心地しはべらず」とおほせらるれば、〔中略〕大殿、帰り参らせたまひて、『されば。去年一昨年の御ことにも、さる

さたにはさぶらひしかど、宮の御年のをさなくおはしますによりて、今日までさぶらふにこそ」となんはべる」と奏せらるるにぞ、「何ごとも、ただ今宵定めはさぶらふべきぞ」とおほせらるれば、さはこの御ことにこそありけれと、今ぞ心得る。

（嘉承二年七月六日 三九五〜三九六頁）

堀河天皇は忠実に対し、傍線部のように「尊勝にて九壇の護摩と懺法」と「さぶらはんずらんこと」について、白河院に伝えるよう、命じる。この「さぶらはんずらんこと」が讓位を指すことは、点線部の忠実が伝える白河院の言葉から分かる。白河院の言葉を受けた堀河天皇は、傍線部のように、今夜、讓位を定めるべきという意向を繰り返し述べる。

ここでは、讓位をめぐる堀河天皇自身の発言が記されていることに注意される。讓位という、時代が動きつつある時を、当事者である堀河天皇の発言によって記録しているのである。讓位に対する讃岐典侍の関心のほどが知られるのである。

讓位に関する記述は、その後、二度見られる。順に見てみよう。

大殿近く参らせたまへば、御膝高くなして陰に隠させたまへば、われも単衣を引き被きて臥して聞けば、「御占には、とぞ申したる、かくぞ申したる。御祈りは、それそれなん始まりぬる。また、十九日より、よき日なれば、御仏御修法のべさせたまふ」と申させたまへば、「それ

までの御命やはあらんずる」とおほせらる。かなしき、せきかねておぼゆ。

(嘉承二年七月十一日 四〇一〜四〇二頁)

傍線部の忠実の発言にある「御占」とは、讓位の吉凶を判断するための占いのことである。堀河天皇が立てた膝の陰に隠れ、単衣を引きかぶった讃岐典侍が耳にした話として、讓位の準備が行われつつある状況を記している。

明けぬれば、大臣殿参りたまひて、院の御使にてことどもありげなるけしきなれば、心なき心地しぬべければ、寝たり。何ごとにか、こまやかに申させたまふ。御位ゆづりのことにやとぞ心得らるる。申しはてて、臥したるところにさし寄りて、「御かたはらに参らせたまへ」といひかけて、立ちたまひぬ。

(嘉承二年七月十八日 四〇六〜四〇七頁)

白河院の使いとして源雅実が参上したこの場面では、話の内容は記されていないが、寝たふりをした讃岐典侍が、讓位の話が行われたのだろうと推し量っている。

以上の二つの場面に共通するのは、讓位に向けて動く場に臥して控えつつ、そこで語られる話に関心を寄せる讃岐典侍の姿だろう。ここで讃岐典侍が臥したのは、讓位のように公のことが話題とされる際、女房は座を外すべきであるが、堀河天皇の容態がよくない今は退出することができないという事情があったためである。すると、本来なら讃岐典侍が耳に

すべきではなく、また寝たふりなどをして聞かなかったことにしなければならぬ讓位の話が、日記に記されていることになる。

もちろん、讓位に関する具体的な話は記されておらず、特に問題となるような記述もない。しかし、ここで注目してきたいのは、讓位の話が行われる場に控え、見聞きする存在として、讃岐典侍自身を描いていることである。限られた人しか知り得ない、讓位に向けて動く現場を知る人物として、自身、つまりは日記の書き手を位置づける記述と言えるだろう。こうした記述の仕方からは、讓位、すなわち「天皇の代替わり」をよく知る立場にあった人物が記した日記として、『讃岐典侍日記』を捉えることも必要ではないかと思われるのである。

そもそも上巻は、上下巻を通しての序が記された後、次のように始まる。

六月二十日のことぞかし、内は、例さまにもおぼしめされざれし御けしき、ともしればうち臥しがちにて、「これを人はなやむとはいふ。など人々は目も見立てぬ」とおほせられて、世をうらめしげにおぼしたりしものを、こと重らせさせたまはざりしをり、御祈りをし、つひにありける御ことをもゆづりまゐらせらるると、わがさたにもおよばぬことさへぞおぼゆる。

(嘉承二年六月二十日 三九二〜三九三頁)

堀河天皇の発病に続いて、傍線部のように執筆時の感慨が記される。「つひにありける御こと」とは、讓位のことである。上巻は、その冒頭から讓位のことを取り上げていているのである。

さらに、上巻の末尾は以下のとおりである。

昼の御座のかたにこほこほとももの取りはなす音して、人々の声、あまたすなり。何ごとにかと聞くほどに、御前より、おなじ局にわがかたさまにてさぶらひつる人、うち来て、いみじうものもいはず泣く。見るに、いとど、そのことと聞かぬに泣き伏さるる心地ぞする。しばしためらひて、いふやう、「あな、心憂や。ただ今神璽、宝劍のわたらせたまふとて、ののしりさぶらふぞ。昼の御座の御物の具のわたり、御帳のひき、御鏡など取り出でさぶらふ。御帳こほつ音なりけり」といふに、かなしさぞ堪へがたき。昼より美濃の内侍をやがて殿のはかしにつけさせたまひつれば、つきまゐらせて、おはしつるやうなど語る。われは、朝餉の御座のことは知らざりつれば、この人の語るを聞きて、何にかはせん。

(嘉承二年七月十九日 四二六〇四二七頁)

堀河天皇の崩御の後、皇位の象徴である神璽や宝劍が新帝のもとへ渡る様子を記して終わる。上巻は、堀河天皇から鳥羽天皇へと、まさに代替わりするところで閉じられているのである。

上巻において讃岐典侍が一貫して関心を寄せていたのは、堀河天皇の崩御に至るまでの様子とともに、讓位であったと言えるだろう。讓位の話は、堀河天皇の御代の終焉及び、次の天皇を意識することであり、これまで稿者が注目してきた讃岐典侍の「天皇の代替わり」という出来事への関心と結びつく。堀河天皇を看取りつつ、来るべき讓位をめぐる話を幾度か記し、最終的には神璽や宝劍が渡る場面で終わる。このような上巻は、鳥羽天皇の代始めを記録する下巻同様、やはり「天皇の代替わり」という過渡期の動向を記録してゆくものなのである。

#### 四、上巻の記録対象

讓位をめぐる場面を中心に、上巻にも「天皇の代替わり」という過渡期を記録しようとする姿勢が見られることを確認してきた。これを踏まえて、上巻は、過渡期の日記として何を記録対象としているのか、検討しておきたいと思う。最も重要な記録対象が病に臥した堀河天皇の様子であったことは明らかであるから、本節では、あえてそれ以外のものに着目する。

次に挙げるのは、六月二十日の堀河天皇の発病に続く記事である。

かくて、七月六日より御心地大事に重らせたまひぬれば、たれも、月ごろとても、例さまにおぼしめしたりつるこ

とは、かたきやうなりつれども、これがやうに苦しげに見まゐらすことはなくて、過ぐさせたまへる、かくおはしませば、いかならんずるにかと、胸つぶれて思ひあひたり。

(嘉承二年七月六日 三九三頁)

堀河天皇の病状が重くなり、人々が胸のつぶれる思いでいることを述べている。注目されるのは、「胸つぶれて思ひあひたり」とあることである。讃岐典侍のことだけを記すのではなく、讃岐典侍も含め、その場に集う人々の心配し合う様子を記そうとした表現と解される。

この「あふ」という表現で人々の様子を記す場面は、他にも見られる。

かく苦しうおぼしめしたれば、大殿油例よりも近く参らせなどするほどに、ただ消えに消え入らせたまひぬ。「あな、いみじ」と泣きあひて、内の大臣、関白殿参り、つとさぶらはせたまふ。おほかた、ののしりあひたり。増誓僧正、頼基律師、増賢律師など召しにやりつつ、頼基律師、すなはち参りて、経読み仏くどきまゐらせらるるほどに、しばしばかりありて、うち身じろきさせさせたまふに、いますこしののしりあひぬ。

(嘉承二年七月六日 三九四頁)

堀河天皇が氣を失った時のことを記した一節である。ここでも、人々が「泣きあひ」、「ののしりあひ」などする状況を記す。同日には、前節で注目した讓位をめぐる堀河天皇と忠

実のやり取りがあるが、その中にも「それを聞かん御乳母たちも、いかばかりおぼえん」(三九五頁)と、乳母達の心情を思いやる一文が差し挟まれている。堀河天皇を囲む人々の様子にも目を向け、記録しようとする姿勢が窺われるのである。こうした姿勢は随所に見られる。たとえば、堀河天皇が一時的に小康を得た折の、「御几帳のうちなる人、かやうにて一年のやうにやませたまへかし、いかばかりうれしからんと思ふ」(四〇四頁)という一文などは、讃岐典侍を含みつつ、その場にいる乳母達の気持ちを記す。また、崩御間際、堀河天皇が戒を受けた直後には次のようにある。

受けさせまゐらせはてて、法印出でさせたまへば、故右の大臣殿の子に定海阿闍梨といふ人の、もとよりさぶらはるる、御枕がみに近く召し寄せ、おほせらるるやう、「経誦して聞かせよ。定海が声聞かんも、今宵ばかりこそ聞かめ」とおほせられて、いみじう苦しげにおぼしめされたれど、御涙もえ出でず。それを聞かん心地、たれかはなのめなる心地せん。たれも堪へがたき心地ぞする。阿闍梨、ややもいらへなし。経の声も聞こえぬは、あれもためらはるるなめりと聞こゆ。

(嘉承二年七月十九日 四一二―四一三頁)

死期を悟る堀河天皇の言葉を聞く場面であるが、讃岐典侍一人の思いを語る形はとられていない。傍線部のように、その場にいる人々全体の思いとして「堪へがたき心地」とし、

さらに定海の様子が記される。もちろん、人々の「堪へがたき心地」や定海の様子が、そのまま讃岐典侍の心情を表してはいる。しかし、これまで見てきた場面も併せ、讃岐典侍の心情を含みながらも、あくまで周囲の人々の心情を記す形をとる場面が散見することには注意されるのである。

このような記述の仕方に関しては、森本元子氏も『讃岐典侍日記』の成立について検討する中で、堀河天皇の発病から崩御までの記述に注目し、「そのひと時ひと時に自分がどんな思いをもち、どんな感傷にひたつたかはほとんど描かれず、作者の心情は、帝の容態、とりまく人々の言動をうつすなかに、間接に写されるといってよい」と指摘する。つまり、讃岐典侍の心情を描くことよりも、「帝の容態」、「とりまく人々の言動」を記す上巻においては、「とりまく人々の言動」こそが、「帝の容態」にも並ぶ、重要な記録対象であったことも考えられるのである。

この点に注目して、さらに堀河天皇が崩御した直後の場面を見てみよう。ここでは、讃岐典侍自身の悲しみを記すより先に、人々が涙する様子を次のように記録する。

僧正、今はと見はてたてまつりて、やをら立ちて、御かたはらの御障子をしのびやかに引き開けて出でたまふに、大式の三位、「あな、かなしや。いかにしなし出でさせたまひぬるぞ。助けさせたまへ」と、声も惜しまず泣きたまふを聞きて、さながら泣きとよみあひたり。左衛門

の督、源中納言、大臣殿の権中納言、中將の御乳母子の君たち、十余人、女房のさぶらふかぎり、声をととのへて、せめておぼゆるままに、御障子をななるなどのやうにかはかとは引き鳴らして、泣きあひたるおびたしき、ものおぢせん人は聞くべくもなし。

(嘉承二年七月十九日 四一九頁)

右に続けて、堀河天皇を最後まで看病した大式の三位、自身の病のために看病することができなかった藤三位の悲嘆のさまが順に記された後、ようやく讃岐典侍のことが述べられる。こうした記述の順序からは、堀河天皇の崩御に接した人々の姿を記録することを重視する姿勢が窺われるのである。讃岐典侍自身のことを述べた後も、乳母達を中心として、周囲の人々の様子の描写が続く。その中に、次のような表現がある。

御乳母たち立たれぬれば、因幡の内侍とて、明け暮れ、あまたの内侍のなかに、とりわきつかうまつりつきたりし人と二人、御かたはらに無期に近くさぶらふ。「あはれ、多くさぶらひつれど、契りふかくもつかうまつりはてさせたまへる」などいひつづけて、いみじう泣かるるさまぞ、いとともよほさるる心地して堪へがたき。

(嘉承二年七月十九日 四二五頁)

傍線部のように、まず因幡の内侍の泣き悲しむ様子を記し、それを受ける形で、点線部のように讃岐典侍の思いが続く。

次の場面も同様である。

大武の三位の局、壁をひとつへだてたる、泣くけはひと  
もして、昼の声どものやうに泣きあひたるなかに、三位  
の御声にて、「あはれ、かやうに日の暮るるに、御格子  
とく参れかしと、心もとなくおぼえしに、いふべきこと  
もなくしなしまゐらせつるは、いかにしつることぞや。

これ、助けよや。ただおはしますらんところへわれを召  
せや。をひ、をひ」と、くどき立てて泣かるる音す。聞  
くぞいとど堪へがたき。(嘉承二年七月十九日 四二六頁)

大武の三位の泣く声を聞いて、「いとど堪へがたき」とい  
う讃岐典侍の思いが記される。さらに、前節で取り上げた上  
巻の末尾でも、「おなじ局にわがかたざまにてさぶらひつる  
人」が、泣きながら神璽や宝剣が渡ろうとする様子を告げる  
のを受けて、「かなしさぞ堪へがたき」とある。

いずれの場面でも、まず人々が嘆き悲しむ様子を記し、そ  
れに対して讃岐典侍自身の思いも「堪へがたき」と続く。  
人々の様子に添える形で、讃岐典侍自身の悲しみを示してい  
るのである。これも、本節で見えてきた、自身の心情を直接的  
に記すことよりも人々の様子を記録することを中心とする記  
述姿勢に通じるものだろう。

上巻は、崩御までの堀河天皇の様子を詳細に記録する点に  
最大の特徴がある。その一方で、本節で見えてきた記述姿勢か  
らは、その場集った人々の様子や動向もまた、重要な記録

対象であったことが窺われる。堀河天皇の御代が終焉を迎え  
ようとする場に集う人々について記すことは、「天皇の代替  
わり」という過渡期の様相を記録することでもあるだろう。  
そして、讃岐典侍の心情を描くことよりも、こうした人々を  
重要な記録対象とする上巻は、やはり過渡期を経験した典侍  
という立場から記録されたものなのである。

## 五、おわりに

以上、本稿では下巻の位置づけを再確認し、上巻について  
若干の検討を加えた。讃岐典侍は堀河と鳥羽という二人の天  
皇に典侍として出仕した女房であるから、その日記に「天皇  
の代替わり」という過渡期がさまざまな形で関わってくるの  
は、当然のことと言える。ただ堀河天皇追慕という主題に収  
斂する日記と見るだけでは、明らかにならないことも多いと  
思われる。本稿が、あえて上巻の最も重要な記録対象である  
堀河天皇の発病から崩御に至る様子以外のものに注目したの  
も、こうした観点からである。

本稿は、前稿を承ける形で出発したため、一方からの考  
察にとどまった面もある。たとえば、『栄花物語』との関係  
や、下巻の堀河天皇を回想する記事との関わりなど、深める  
べき問題は多い。今後の課題としたい。

注

- (1) 石井文夫校注、新編日本古典文学全集『讃岐典侍日記』解説（小学館、一九九四年）。
- (2) 拙稿「天皇の代替わりと『讃岐典侍日記』——鳥羽天皇から見る下巻の位置づけ」、『皇統迭立と文学形成』和泉書院、二〇〇九年五月刊行予定）。
- (3) 『讃岐典侍日記』の引用は、新編日本古典文学全集に拠り、引用本文の下に頁数を記す。
- (4) 大嘗会の御禊が行われたのは、実際には天仁元年十月二十一日。
- (5) なお、大嘗会よりも御禊に比重を置いて記述となっていることに関しては、御禊が、たとえば『更級日記』で「一代に一度の見物にて、田舎せかいの人だに見るもの」（新編全集 三四一頁）などとされるように、特に女房達の関心を集める行事であったことも関わっているだろう。また、特に本稿で注目する『栄花物語』では、正編、続編ともに、天皇の代始めを語る際、何らかの形で必ず御禊に言及し、大嘗会よりも詳細に記している点なども注意される（後掲注（9）参照）。
- (6) 森田兼吉『讃岐典侍日記』の成立」（『日記文学の成立と展開』笠間書院、一九九六年、初出は一九六三年）は、大嘗会の一節の他、大嘗会の御禊、五節のいとなみ、清暑堂の御神楽を、「先帝と何のかかわりもなく、追憶を少しも含まない記事」として挙げ、「序にいう執筆動機とは全く無関係で、異質のもの」で、『讃岐典侍日記』という作品にあっては、最初の意図を外れ、破綻をきたしてしまつた」とするが、氏の挙げる記事が、すべて鳥羽天皇の代始めと関わる行事であることに注目すべきだろう。堀河天皇の追慕という主題とは異なる基準で、これらの記事は採録された

ものと考えらる。

- (7) 原岡文子「中古における歴史物語観——讃岐典侍日記・袖中抄・袋草紙などに見る——」（『国文学解釈と鑑賞』五四—三、一九八九年三月）、石坂妙子「〈典侍〉讃岐の日記——『栄花物語』の継承——」（『王朝女流文学の新展望』竹林舎、二〇〇三年）など。
- (8) 『栄花物語』の引用は、新編日本古典文学全集に拠り、引用本文の下に頁数を記す。
- (9) 池田尚隆『『栄花物語』の即位儀礼をめぐって』（『国語と国文学』六八一—、一九九一年十一月）は、『栄花物語』の天皇観、撰閲観を浮き立たせるものとして即位儀礼に関する記述に注目、『栄花物語』正編の冷泉から後一条まで六代の即位儀礼を検討し、特に正編最後の後一条天皇について『『栄花物語』の即位儀礼記事の最も完成されたかたち』とする。そして、後一条天皇の際には、即位式における天皇の姿、御禊の様子を詳述し、大嘗会和歌をもって大嘗会を表現した後、「このたびの御即位、御禊、大嘗会などのほどの事ども、すべて数知らずめづらし。やむごとくなく年中行事の御障子にも書き添へられたる事ども、いと多くなむある。」（巻第十二、たまのむらぎく 八八頁）と、「総括的な言辞でもって後一条天皇の即位儀礼を締め括っている」ことを指摘する。本稿では、「最も完成されたかたち」である後一条天皇の代始めの締めくくりとなるところで、即位、御禊、大嘗会が順に挙げられていることに注意しておきたい。『栄花物語』では、記録すべき代始めの行事として、この三つを特にひとまとまりで捉えていたことも窺えるだろう。なお、続編においては、後朱雀天皇の際には御禊、大嘗会を記し、後冷泉天皇の際には即位式を詳述し、御禊、大嘗会については簡略に記す。後三条天皇は治暦四（一一〇

六八)年に即位したが、『栄花物語』にはこの前後約三年間の記事がなく、したがって代始めの記事もない。白河天皇の際は御親のみを記す。堀河天皇については、引用したとおり。

(10)石坂妙子前掲注(7)論文。

(11)宮崎莊平「宮廷女房日記の展開—中古から中世へ—」(『女房日記の論理と構造』笠間書院、一九九六年、初出は一九八九年)。

(12)中村成里「讚岐典侍日記」における天皇と摂関—執政者藤原忠実の肖像—(『国文学研究』一四六、二〇〇五年六月)は、『讚岐典侍日記』における藤原忠実の位置づけを論じる中で、天皇の讓位問題に注目する。

(13)下巻において、鳥羽天皇の発言は、嘉承三(一一〇八)年正月の初出仕の記事に、『徒然草』にも引用される「降れ、降れ、降雪」(四三九頁)など、幼主であることを印象づける発言が記された後、諒闇の間は発言が一切見られず、諒闇が明けて初めて讚岐典侍に直接向けた発言が記されるという、状況に応じた形になっている(前掲注(2)拙稿参照)。「讚岐典侍日記」では、天皇の発言を記すということに注意が払われていたと考えられるだろう。

(14)『殿曆』嘉承二年七月七日及び十日条、『中右記』嘉承二年七月六日条によると、七日と十日の二度、讓位の吉凶が占われた。

(15)『讚岐典侍日記』でも、讓位のように公のことが話題とされる場合、女房は座を外すべきと認識しているが、やむを得ない状況にあることが、乳母である三位殿の言葉によって語られている。

かくおはしませば、殿も夜昼たゆまず参らせたまへば、いとはれにはしたなき心地すれば、三位殿も、「をりにこそしたかへ。かばかりになりたることに、なんでふものはばか

りはする」とあれば、いかげはせんとして過ぐす。

(嘉承二年七月十一日 四〇一頁)

(16)阿部泰郎「『とはすがたり』と中世王権—院政期の皇統と女流日記をめぐる—」(『日本文学史を読む』Ⅲ中世、有精堂、一九九二年)は、堀河天皇があまりの苦しさに神鷹の箱を胸に乗せ、楽になるかと試みる場面(新編全集 三九九頁)などに注目して、「そこで手にとられ、呼ばれる神器は、王の身体—靈魂、ひいては王権の根源を支えるモノとして在った」ことを指摘し、「讚岐典侍日記」は、上巻の「旧き王の死」と下巻の「新たな王の誕生」とが、一貫した、照応する構造を成しているのであって、それを繋ぎ渡す内侍の立場から記されたテキストであった」とする(17)もちろん、上巻に、讚岐典侍一人の心情を語る場面がないわけではない。また、こうした上巻の堀河天皇に対する記述姿勢は、下巻の堀河天皇を回想する記事との違いとともに注目すべき問題であるだろう。

(18)森本元子「『讚岐典侍日記』の成立—その心理と経緯—」(『女流日記文学講座』第四巻、勉誠社、一九九〇年)。

(たんげ・あつこ 本学大学院博士後期課程)